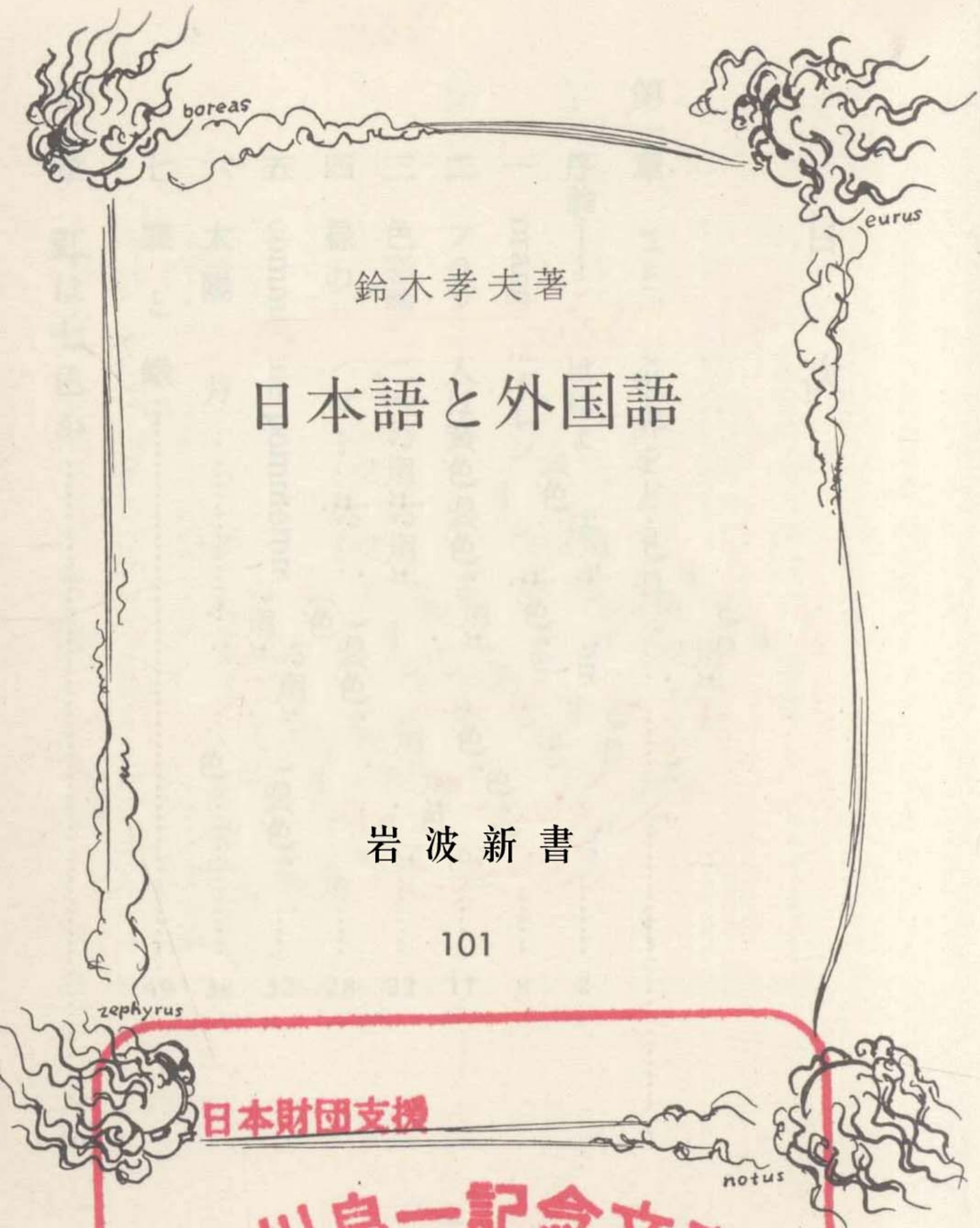
鈴木孝夫著

日本語と外国語

岩波新書

101



鈴木孝夫著

日本語と外国語

岩波新書

101

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

鈴木孝夫

1926年東京に生まれる
1947年慶応義塾大学医学部予科卒業,
1950年同大学文学部卒業
専攻—言語社会学
現在—杏林大学外国語学部教授
慶応義塾大学名誉教授
著書—「ことばと文化」(岩波新書)
「ことばと社会」(中央公論社)
「閉された言語・日本語の世界」
(新潮社)
「武器としてのことば」(同上)
「ことばの人間学」(同上)
「ことばの社会学」(同上)ほか

日本語と外国語

定価はカバーに表示してあります　岩波新書(新赤版)101

1990年1月22日　第1刷発行 ©
1995年4月5日　第16刷発行

著　者　鈴木孝夫(すずきたかお)

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社　カバー・半七印刷　製本・田中製本

ISBN 4-00-430101-7　Printed in Japan

目　次

第一章　ことばで世界をどう捉えるか……1
序論――ことばによる環境認識……2
一　orangeはオレンジとは限らない……8
二　フランス人は黄色の封筒が好き？……17
三　色彩語の二つの用法……22
四　緑のリンゴ……28
五　comme une pomme（リンゴのような）……32
六　太陽と月……38
七　蝶と蛾……49
第二章　虹は七色か……59

一　世界認識の反映としての言語……60
二　英語の辞書・事典の中の虹……63
三　文学・童話・絵本の虹……71
四　学校教育での虹……76
五　フランス語・ドイツ語・ロシア語の虹……80
六　科学者の虹、民衆の虹……91

第三章　日本人はイギリスを理解しているか……105
一　文献依存の外国文化研究はなぜ生まれたのか……106
二　国際交流の第一歩は何か……109
三　英国人が絶対に食べないもの……111
四　運動会の賞品は現金……113
五　足は恥部の一つ……115

第四章　漢字の知られざる働き(1)……127
——音読みと訓読みの関係——

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一　意味論的透明性と不透明性……128
二　高級語彙と基本語彙の関係……135
三　概念の二重音声化と表記の双面性……140
四　日本の漢字の双面神的二面性……143
五　概念表記の不変・恒常性……157

第五章　漢字の知られざる働き(2)……165
——視覚的弁別要素の必要性——
一　貧弱な音韻・音節構造を補う……166
二　抽象的な意味構造を補う……176
三　視覚利用の日本語にとっての必然性と利点……194
四　カナ書き外来語の評価……204
五　言語干渉による日本語の変容……222

あとがき……241

第一章　ことばで世界をどう捉えるか

序論――ことばによる環境認識

ことばは実にいろいろな働きをする。自分の願望を他人に示すことも、また他人を自分が望むように動かすことも、ことばで出来る。見聞きしたこと、思ったり考えたりしたことを誰かに伝えるのも、ことばの大切な働きの一つである。普通この働きは、ことばの「伝達機能」などと呼ばれ、しばしば人間言語の最も重要な働きとされる。

ことばの伝達機能

はたして人間の言語というものが、起源的に最初から、人間同士が相互に意志、願望、期待などを伝え合うために発達したものかどうかについては、必ずしも決定的なことは言えないが、少なくとも現代人の社会生活においては、言語の主たる役目は、この伝達行為(コミュニケーション)にあるといってもよいと思う。

このことは現在ことばを研究する学問である言語学が、ことばの使い方を支配する規則や、ことばを現実の場面でどう使うかなどの法則を求めて、「文法論」や「語用論」などの名の下に、長足の進歩をとげていることに示されている。

ところが、これまでの言語の研究であまり重要視されていないことばの働きがある。それは、ことばの「叙述機能」あるいは「描写機能」などと呼ばれる働きである。言語という人間の基本的な活動は、たとえて言うと、写真が対象をフィルムに映像として定着させたり、録音機が現実の音をテープの上に録音するのと同じく、世界のあらゆる現象、出来事を、人間の頭脳を通して音声や文字に表現することと考えられる。

ことばの叙述機能

ことばとは、要するに人間が世界を認識する手段であると同時に、その認識結果の証拠(あかし)でもある。この面に焦点を当てる研究が、意外なことにこれまでの言語学では比較的少ない。私は自分の好みとして、人間はことばで世界をどう把握するのかという問題に一番関心があるので、この本の中で日本語と外国語、とは言ってもすべての外国語を視野におくことは出来ないので、日本人に最も馴染(なじ)みのある西欧語として、英語、フランス語、ドイツ語、そしてロシア語の四つを選んで、日本語との比較を試みてみたい。

赤い太陽　白い太陽

第一章と第二章では、主として単語のレベルでの比較を扱っている。具体的に言うと、第一章では、日本語と外国語の間に見られる認識対象の整理、まとめ方の違いを取り上げた。別のことばで言うと、何と何は同じで、これとあれは違うという同一性の認識に見られるしくみの相違である。

例えば日本人の子供に、赤いものの例を挙げてごらんと言えば、リンゴ、血、太陽、金魚

といった具合に次々と出てくると思う。これは日本語で世界を赤という色の観点から整理した結果なのである。しかしここに挙がったものが、どんな外国語でも赤いものの例にされるかと言えば、必ずしもそうではない。リンゴが緑の代表例だったり、太陽の色は白と考えられている言語もあるからである。無数とも言える対象を整理し、同類にまとめる仕方は言語(文化)によってこのように異なる。

靴と長靴

もう一つ例をあげると、靴というもの(ことば)がある。日本人が靴と言えば、長靴も短靴(これが普通の靴)も、皮のサンダル、昔の藁靴もすべて靴と呼べる。ここではそれぞれがもつ、形状、性質、材質などの相違は無視されて、とにかくすべて靴にまとめられている。

ところが英語では、普通の靴は shoe であるが、長靴は boot であって一般には shoe の中に入らない。この二つは違うものと考えられている。だから多くの辞書では長靴を定義するとき、shoe を使っていない。例えば次のようである。

boot : type of covering for the foot which also covers the ankle (and sometimes also part of the leg).　　*Collins English Learner's Dictionary*, 1974.

〈踝(くるぶし)をも隠す一種の足を覆(おお)うもので、時として足首より上までも覆うもの。〉

何とも廻りくどい説明であるが、踝を覆わないものが shoe であるから、こうなるのであ

る。日本語ならば、どちらも広い意味で靴という一つの同じものに含まれてしまう二つの対象が、英語ではこのように別種のものとされるわけである。このように言語によっては同一性の認定の基準の取り方が異なるから、この意味でのものの数は等しくないことになる。

しかも面白いことに、日本語には〈はきもの〉という言い方があり、これは靴よりも使い方が広く、下駄、草履まで含むことばである。しかし不思議なことに、足袋や靴下は、考えてみれば「はくもの」であるのに、しかし〈はきもの〉の部類には入れないのが普通である。

他方、英語には日本語の〈はきもの〉に相当する footwear (footgear) という語があるが、しかしこれには靴、長靴、スリッパだけでなく靴下まで入ってしまう。このように一つの言語が、あることばを使って対象世界を整理しまとめる仕方は、他の言語の一応は同じと思われる語の場合と、時として明らかに、時としては微妙に違うのである。

自覚されぬ認識法の違い

ところが、いま述べたような対象を分類する際の認識のしくみは、人々が同じ言語を使っている限り、普通は自覚されることがない。だがひとたび日本語と外国語が同時に絡んでくるような場面に出会うと、双方の文化(言語)における認識の仕方の違いは、いろいろと面白い問題、時には困った誤解の形で表面化するのである。

しかし二つの異なった言語が私たちの意識の中で出会いさえすれば、この認識のしくみの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

違いが自覚されるのかと言えば、そうとは言えない。むしろ多くの場合、外国語を長年研究したり、実際にそれを使って仕事をしたりしている人でさえも、ほとんど気付かないのが実情である。

その理由の大半は、日本語と外国語を安易に対応させて分かったつもりになってしまうことにある。これには辞書という便利な道具にその責任の一部があるといえよう。虹→rainbow、犬→dog、飲む→drinkと覚えることで、誰でも両者が等しい、同じ内容だと思うのは無理もない。しかも、一応同じだということで始めなければ、学習は先に進まないから止むを得ないともいえる。

本書の構成

すでにふれたように、第一章では、まず色彩語のいくつかを例にとりながら、これまでのような形式の辞書をいくら引いても誤解する可能性のある問題を扱ってみた。次に、太陽や月のような、普遍的に存在する対象をめぐる異なった文化の対応の違いを、色彩や価値観の面で考察する。最後に、蝶と蛾の区別をめぐる諸問題を取り上げた。

第二章は、虹という自然現象の言語文化的な扱いの多様性を明らかにすると同時に、このような事実を意識することが、いかに難しいかを明らかにしている。

第三章では、日本人はどれだけイギリス人を知っているのだろうかという命題を、言語文化の観点から検討する。日本ではこれまで長い間、英語を学ぶことの重要な目的の一つは、

英語を使う人々の文化を知ることにあると言われてきた。もしそれが本当なら、これほど長く、しかも重点的に英語を学んで来た日本人は、イギリス人の気質、考え方、生き方などについてかなり詳しくなっているはずである。

ところが事実は必ずしもそうとは言えないのではないか、というのが私の考えであって、外国の文化や外国人のものの見方、考え方などを知るためには、そのつもりで専門的に研究することなく、ただ漠然と外国語に長期間接していても、あまり効果は上がらないというのが私の結論である。

最後の第四章と第五章は、これまで多くの日本人、殊に学者や知識人が頭に描いて来た西欧先進諸国の実情、ことに言語教育の社会的効率は、どうも片思い的なところがあって、現実は必ずしも日本の場合よりも秀れているとは言いかねるものだということを、英語と日本語について、それぞれの国の人にとっての学習の難易度という点に絞って、私の分析を示したものである。

明治以来、社会の近代化の阻害要因の最たるものとして、ことあるごとに悪者扱いされて来た漢字という文字記号が、実はこれまで多くの専門家も指摘しなかったような、西欧語には見られぬ利点を持ち、また本来の日本語が持っている各種の弱点を、いわば補強する役目を果たしていたという、私の年来の主張を、出来るだけ簡単にまとめたものである。

この本を書く際に私が一貫して持ち続けた考えは、外国語の書物を原語で読むという行為は、それが広い意味での自然科学的な性質の文献である場合は、所期の目的、つまりそこに述べられている自分の知らない、新しいことを吸収するという目的を達成することが比較的容易に出来る。しかし、よく言われるような高尚で抽象的な目的、つまり外国の秀れた思想や、異なったものの見方が外国語の書物を読むことで身につくという、教養主義的な効用は、従来の学習方法を踏襲する限り、一般に考えられているほど期待できないのではないか、ということである。

教養主義的な効用

一　orangeはオレンジとは限らない

茶色の車

今から十年以上も前の一月初め、私はイェール大学の言語学部で半年の間、「日本語と日本文化」の大学院セミナーを担当するために、米国コネチカット州のニューヘイヴンに赴いた。

当時の北米は百年来の大寒波襲来とかで、その日も猛烈な吹雪だった。ホテルから目と鼻の先にある大学に行くにしても、歩けたものではない。そこでエイヴィス・レンタカーに電話をして車を頼むと、十分ほどでオレンジ色の小型車が迎えに行くから、すっかり身仕度を

して、ホテルの入口で待っていてくれとのことだった。

私はいつでも飛び出せるようにと、ガラス戸越しに、次々と玄関前に止まっては出て行く車を見守っていたが、約束の十分を大分過ぎても、それらしき車は一向に現われない。二十分近くなったとき、ハッと気がついた。さきほどから、少し離れたところに茶色の車が停まっていて、一人の男がこちらを窺うように見ているのだ。これだと思い、駆けよって行くと、果してそれが私のレンタカーだった。長く待たされて見るからに不機嫌そうなその男に、オレンジ色の車が来ると言われていたので判らなかったと言うと、男は平然として、この車はorangeだよ、と答えたのである。

途端に私は「あっ、そうだったのか」と、驚くより何とも嬉しかった。またもや英語の隠れた秘密の一つが解けたからである。私の目にはどう見ても茶色としか形容しようのないこの色が、どうも英語ではorangeの範囲に含まれているらしい。

色見本を回覧して

数日後、私はその車の製造会社に手紙を出して、すべての車の色見本を送ってもらった。やはり私が借りた車の色は、tawny orange(黄褐色に近い茶色)と呼ばれるオレンジ色の一種となっていたのである(口絵参照)。

後日帰国した私は、ある大学で講演を頼まれたとき、集まった百人ばかりの先生方に、名称の部分を隠したこの色見本を回覧して、何色と思うかを書いて欲しいとお願いした。

茶色、赤土色、渋色、褐色、チョコレート色、ココア、セピア、レンガ色、コーヒー色、そしてブラウンなど、各種各様の回答が出て来たが、オレンジ色というのは一つもなかった。(1)

その後も私はこの色見本を使って、何度か同じ実験を試みたが、オレンジという答には、ただの一度も出会っていない。問題のこの色をオレンジとは見ないことは、私一人の個人的な偏向ではなく、日本人一般の色彩分類の傾向を示していることが、これで明らかとなったわけである。

私の誤解

日本語のオレンジ(色)ということばは、いうまでもなく英語のorangeに由来する。ことばとしてのオレンジだけではなく、今では実物も果物屋の店先で普通に見かける。従ってその意味内容について、誤解など起こるはずもない、極めて易しい語だといえよう。

しかも私は長年にわたって英語を専門に研究しているし、これまで何度も英語国に滞在して、袋一杯のオレンジをマーケットから毎週のように買って来るという経験も持っている。その私が、このような思わぬことから、実は英語のorangeということばの意味を、正しくは把握していなかったことを知る破目になったのである。英語の形容詞としてのorangeを、日本語のオレンジと同じだと思い、その意味に引かれて誤解していたことになる。

ところで、さきに私が、どう見ても茶色としか言いようのない車を、アメリカ人にオレン

ジだよと言われたとき、驚くよりも、非常に嬉しかったと書いたのには、次のようなわけがあったのである。

この事件より大分前のある日のこと、家内がアガサ・クリスティの *The Clocks*『沢山の時計』を持って来て、これはどう訳すのかと次の文章を示したことがある。

「オレンジ色の猫」

I looked up at the numbers I was passing. 24, 23, 22, 21. Diana Lodge (presumably 20, with an orange cat on the gate post washing its face), 19……

「家々の前を通りすぎながら番号を24、23、22、21と順々に見上げて、20号とおぼしきダイアナ・ロッジ――その門柱の上ではオレンジ色の猫が顔を手で洗っていた――も過ぎて、19と来ると……」と訳してみて、私も《オレンジ色の猫》とは何のことだろうと考え込んでしまったのである。

英国は人も知る巧みな家畜改良技術を誇る国だから、想像も出来ないような色や形の犬や猫がいてもおかしくない。そこで第一の解答として、orange cat とは正に文字通りオレンジ色の猫だと考えてみる。そういう珍しい派手な色の猫がイギリスには実際にいるのだ、と。

しかし、どうあっても《オレンジ色の猫》とは『不思議の国のアリス』にでも出て来そうな感じで、本当かなと自信がなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com